卒業

睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卒業

【Nコード】

N1230Y

【作者名】

睦月

【あらすじ】

2年前に突如として現われた義父。それも、私と5歳しか離れてないとかってというのがありえなかった。だけど、そんな矢先ママが事故に巻き込まれて死んでしまった。心の葛藤と揺れる恋心に決着をつける事にする。

(前書き)

思いつきで書いたものです。突っ込みどころ満載だと思いますが、
広い心で読んで頂けると幸いです。 「――」 <

あれ？声に出てた？
いやぁ……。うっかりうっかり。

「ってか、もう復活したの？さすがだね。……しぶとい」

最後はぼつそとね。

聞こえない様に言ったつもりだったんだけど、どうやら義父には聞こえていたらしい。

「しぶといってなんだ！！しぶといって！！それに、里桜はどうして、そんなに手が早いんだ！！」

「ちよつと！！聞き捨てならない事言わないでよ！！そつちが悪いんでしょ！！バツカなこと言うから」

「こら！里桜。とおさんに向かってそつちとはなんだ！しゅうちやんって呼べっていつてるだろ！！」

……しね。本気でいっぺんシンデレバイイ……。冷めた目で義父を睨みつけると私は自分の部屋へと戻った。

三村 里桜 18歳。

私が16の時にママが再婚して、あいつ……。三村 周二が私の義父になった。

だけど、再婚して半年もしないうちに酔っ払いが運転する車にはねられてママは帰らぬ人となってしまった。

あの時、あいつは半狂乱になってママの死を悲しんだ。

その時初めて本当にママが好きだったんだって思った。だって、いつもひょうひょうとしていたのに、周りに構わずあんなに泣き叫んでいたんだから。

それまで、私は絶対にあいつをママの旦那なんて認めたくなかった。何をしても、何を言っても笑ってごまかして……。

そんなあいつをママは「もう、しょうがないわね〜」ってここにこ笑って許してた。

それがなんだか無性に腹が立っていた。

だから……あの日、あんな事を言ってしまった。

『男に媚びて一体何なのよ！アンタなんてもうママじゃないわ！！』

言った言葉はもう取り消せない。

例えそれが最後の言葉だったとしても……。

「里桜、起きろよー。学校に遅れるぞー！今日が最後なんだからしつかりしろよ」

眩しくて目が覚めた。

次に、なぜ奴がここにいるのかと疑問に思った。

それから頭が働き始め、まず一発殴っておいた。

え？だって、いくら義父とはいえ勝手に乙女の部屋に入るとかあり

えなくない？

「……ぐう……。朝から……。愛を感じるぜ……。う
えっ！！」

うん？床にはいつくばっているところを踏んで部屋を出ましたが何
か？

さて、気を取り直して、今日は卒業式。

今日で高校も終わって4月からは社会人だ。

あいつは大学に行かっていったけど、いつまでもあいつに迷惑を
かけるわけにはいかない。

私は未成年だけど、社会に出れば一人でだって暮らしていける。

そろそろ、解放してあげなきゃ。

あんなのでも、私を高校に行かせてくれて、生活もさせてくれた。
そんな所は本当に感謝している。

血もつながらないただの他人なのに。

「なあなあ……。卒業式、この格好でいいかなあ？」

洗面所で顔を洗っているとよきつとあいつが顔をのぞかせた。

「え！？来るつもりなの！！??？」

アイツの格好に思わず振りかえる。

「あつたりまえじゃん！！可愛い愛娘の晴れ姿を見なくてどーすん
だよ！」

……。愛娘ね。

溜息をつきながら顔を拭けば、あいつを無視して私はさっさと洗面所を出て朝食の用意をする事にした。

「なんだよー！無視するなよ！また反抗期なのか？」

遠くで何か聞こえるけど、聞こえない事にしよう。うんうん。

さて、今日は軽いものでいっか。

トーストと、目玉焼きとサラダ。あとはヨーグルトでもつけとこうかな。

しょうがないから2人前用意する。

「ご飯出来たから、置いとくよ！」

洗面所に向かつて声をかけると返事が聞こえた。

なんか、すぐいくーとか言ってたけど、聞こえないきこえない。

「いただきます」

もしかもしかとご飯をたべていたら、慌ててあいつもやってきた。

「もぉー！すぐ行くから待ってて！って言ったのに！！」

なんていいながら席について手を合わせて「いただきます」と言う
とむしゃむしゃとそれを食べ始めた。

私は、あいつが食べ始めたところにはすでに終わりかけ。

食器を下げようと立ちあがったところで、一言言っておかなければ
いけない事があった。

「私、一人暮らしするから」

それだけ言つと、さつさと食器を流し台に持って行つてカバンを持って出掛ける。

・・・口から何か出てたけど、見えなかった見えなかった。扉を閉めた途端、何かすごい音が家から聞こえたけど、それも聞こえなかった事にする。

「ふふ。これから覚悟しててね」

ママが死んで、泣けなかった私を泣かせてくれたのはあなた。最後にいった一言にずっと悔やんでいた私を開放してくれたのもあなた。

この2年、悲しいときも辛いときも嬉しいときも楽しいときも傍にいてくれたのは貴方だった。

だから、いつも思ってた。

ずっとずっと他人だったらよかったのに。

義父なんて嫌だ。って。

でも、これから私は一人で生きていける。

一人の女として見てもらう。

子供としての役目はもう卒業する。

貴方の言う『好き』を『愛してる』に変えてみせるわ。
待っててね。しゅうちゃん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1230y/>

卒業

2011年11月1日15時18分発行